

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

羈旅にして作れる歌

(巻第七 一一七三番歌)

飛驒人の真木流すとふ丹生の川

言は通へど船そ通わぬ

何かに導かれるように、ここに来た。偶然出会った人が教えてくれた川に下りられる場所。そこに穏やかな目のおじいさんが私達を待っていた。

「子どもの頃、大切なことは、みんな川から教わった。」

と、その人は語り始めた。流れ、水の冷たさ、そこに住む魚たち。淵に浮かべる筏。覗き込んで見るけれど、底の見えない深い淵。水は清らかに澄んでいるのに、底が見えない怖さは本物だ。スリルが冒険心を育て、危険が注意深さを育てる。「昔は今のよう、うるさいことは言わなかったから、毎日『川』さ。」目を閉じると浮かぶ。自然の大きな懐で、小さい者が怖さを乗り越え、たくましい少年に変わっていくその姿を。

「それから、この辺は伝説がいっぱいだ。」その淵は龍宮城とつながっている。お姫様の弾く琴の音が聞こえることから琴淵と言われ、琴淵神社があること。そこに奉られていた二つの竜頭のうち、一つが流されてからこの辺りの天候が不順になったこと。その昔、旅のお坊さんのために一杯の水を遠くから汲んできたなら、「それは難儀だろう」と杖をついてくださり、翌朝その場所から湧き水があふれ出たこと。その杖はやがて桂の木となったが、その木が斜めになって枯れたとき、すっかり湧き水も涸れてしまったこと。それ



を語るおじいさんも、山の神の一人ではと思ってしまう。不思議な空間がそこにあった。語り継がれる伝説があるということは、想像力がふくらんで、土地の魅力につながってくるように思う。「嘘かもしれないが、」本当かもしれない。連れてきた息子と娘は、話の間ひたすら小魚を追ってはしゃいでいた。「こんにちは。」水着の袋を肩に掛け、少年たちはすぐ上の橋を渡っていた。「今はみんなプールだよ。遊びもゲームばかりだ。」山の神はぼつりと言った。

写真は、岐阜県大野郡丹生川村根方を流れる小八賀川である。「飛驒の人が建築良材の立派な木を流すという丹生川は、激流だから噂ばかり通っている、船が通わない。会うことができないよ。」と船の不通を歌っている。この歌が村名の由来になり、碑が建てられていた。

捕まえた魚を炭火で焼いてもらい、子どもたちはそれを頭から骨ごと豪快にいただいた。採りたてのキュウリとトマトも最高の味だった。にこにこ大満足の息子に、「またおいで。今度は川遊びをたっぷり教えてやるよ。」「うん。」と答えたその顔は、まぎれもなく少年への始まりに思えた。川は人を呼び、人は川に魅せられる。そうして時代を越え、伝説は語り継がれていくのだろう。